

## 蕎麦の常識非常識

「ならぬことはならぬものです」・・・会津藩「じゅう什の掟」

会津藩には六歳から九歳までの藩士の子供達は十人前後で集まりを作り、毎日順番に仲間の家で最年長者が座長となって「什の掟」を一つひとつ説明して聞かせ、昨日から今日にかけて掟に背くようなことがなかったか反省会を行うのが常でした。「什の掟」の内容は「嘘をつかない・弱い者いじめをしない・年長者を敬う・・・」等人間としての基本道徳が説かれていて、「掟」の最後には「ならぬことはならぬものです」とあり・・・理屈や言い訳け無用という強い規範意識が土台になっていました。「徳川宗家への絶対的な忠誠・忠勤」を基軸とした初代藩主保科正之の定めた家訓かきん（十五ヶ条）はそういった風土の上に歴代藩主によって堅く守られてきたのです。

徳川宗家への忠誠への誓いは極めて厳しいもので、「もし私の後続く藩主が徳川宗家に対し二心を抱くようなことがあればそれはわが子孫ではない。従って家臣は全員これに従ってはならない」とまで記されていたのです。この家訓は幕末まで会津藩の精神的な支柱であり続けました。

第九代藩主・松平容保かたもりが薩長と対立することが火を見るより明らかだった「京都守護職」を引き受け、新選組を傘下に置いて共に京都の治安維持にあたったの

も、家訓である徳川宗家への絶対忠誠の心が根底にあつたためです。

戊辰戦争<sup>ぼしん</sup>での徹底抗戦の結果、白虎隊の悲劇を生み、会津藩はついには新政府軍に全面降伏することとなったのです。藩主松平容保は新政府に対し恭順の意を示したのですが、既に朝敵とみなされていた会津藩（二十三万石）は改易という厳しい処分を受けました。辛うじて家名存続は許され、明治二年に陸奥<sup>むつ</sup>の国北端<sup>となみ</sup>の斗南に移封（三万石・寒冷地が多く実質七千石）されたものの、これは実質的には流罪に等しいといわれる厳しい処分でした。

ここまで厳しく徳川宗家への忠誠を誓う家訓を定め、藩内に徹底せしめたのは何故なのか？ それに答えるには初代藩主・保科正之<sup>ほしなまさゆき</sup>の出生から会津藩主に至るまでの歩んできた道を語らなくてはならないでしょう。

正之は慶長十六年（一六一一）、二代将軍秀忠と側室との間に生まれた庶子で、三代将軍家光の異母弟なのですが、正妻（お江）への配慮から七歳の折に信濃国高遠藩（二万五千石）藩主保科正光の養子に出されることになります。

寛永六年（一六二九）、家光が鷹狩りに出かけた際に、僅か三万石（五千石加増）の小身に甘んじている正之の存在を始めて知り、二人は江戸城で初対面を果たすことになるのですが、家光は正之の謙虚で誠実な人柄と優秀な頭脳と深い見識に絶大な信頼を寄せるようになって行くのです。

間もなく正之は山形最上藩<sup>もがみはん</sup>二十万石へ大拔擢され、その七年後には会津藩二

十三万石へ転封、次第に幕閣にも近づいて行くのです。

家光は病を得て病状芳しくなく、己の命の長くないのを悟って長男家綱（十歳）に將軍職を継がせ、正之に家綱の後見役として補佐を託したのです。

これにより会津藩は徳川御三家（尾張家・紀伊家・水戸家）に次ぐ実質四番目（ナンバー四）の格式になったのです。

幕閣に加わった正之は幼君家綱を補佐することに専心するため江戸城に居を移し永く国元へは戻らなかったといえます。そして時代の変化に即した武家諸法度の改定に着手する等、幕藩体制の強化・安定に大きく貢献することになります。これが武断政治から文治体制への移行の始まりでした。①殉死の禁止（無用の死によって重臣を失うの愚を禁じた）、②「末期養子の禁」の緩和（五十歳未満の大名の末期の養子縁組を認め家の取り潰しを回避し、浪人の増加・社会不安を減少させた）、③「大名証人制度の廃止」（参勤交代の際、大名や家臣の家族を人質として江戸に住まわせる制度の廃止・まず家臣の家族の人質廃止）などを実現させ、その功績は「三大美事」と称えられ、幕藩体制の安定・強化に大きく貢献したのです。

またその間、明暦の大火（明暦三年・一六五七）によって江戸は壊滅状態に瀕するのですが、正之は自ら陣頭に立って指揮を執り、幕府が貯えていた米の放出、大規模な粥の炊き出し等を行い「民衆救助」を断行するとともに、復興に際して

は「天守無用論」を提唱して巨額の費用を要する江戸城天守閣の修復再建を中止し（明治維新まで再建せず）、民生の復興安定を優先させたのです。そして用水確保のための玉川上水の開削や両国橋の架設、延焼防止対策として広小路の新設など江戸の防災都市への改造に着手したことで知られています。

家綱が成人し正之が老境に入って死が近くなったある時、屋敷にあったたくさん書類を全部庭で焼いてしまったといいます。このように幼君家綱を強力に補佐しながら決して己は表に出ず、「自分の足跡を消しながら死んでいった」稀有の名君だったのです。（致知「三戸岡道夫 v s 中村彰彦対談」）

保科正之の名が同時代の水戸光圀みつくにや知恵伊豆（松平信綱）などに比べ一般に知られていないのは、正之のこういった人柄に起因していると思われます。

かくして、御恩のある異母兄家光公から託された「四代家綱」の補佐役の仕事を忠実に果たしながら会津藩主を務めるという二枚看板の離れ業を成し遂げたのです。「保科正之・徳川將軍家を支えた会津藩主」の著者・中村彰彦氏は、正之を評して「仁じんの人」（朱子学）であったと述べています。

正之の生い立ちと政まつりごとへの関与を中心に書いてきましたが、実は正之にはもう一つ隠れた顔があります。それは正之が比類なき「蕎麦の伝播者」であったことです。

正之が育った高遠は、そば切り発祥の地といわれる地域の中心近くであり、正

之も幼い頃よりそば切りに馴染んでいたと考えられます。また「高遠のそば」を三代将軍家光公に献上していたと伝えられていますが、両者の緊密な関係を考へれば十分考えられることでしょう。

また、山形最上藩に移封された折に多くの家臣が同行したのはもちろんですが、領民からも慕われていたため、町民や農民も自ら志願して同行したといいます。その数三千人に達したというのが専らの言い伝えです。

尤も、急な禄高の増加（三万石から二十万石へ）に伴い家臣の供揃えが不足したこともあり、字の読み書きができる者達を領内から広く雇って不足を補い、山形・最上への移動を行った側面もありますが、正之がいかに領民に慕われていたかを示す逸話の一つとして語り継がれ、高遠では正之の山形転封後も、彼を偲ぶ祭礼が昭和の時代まで続けられていたといえます。

高遠が日本有数のそば処であり、藩主が無類の蕎麦好きでしたから、蕎麦打ち職人が同行者の中に多く含まれていたことは間違いないと思われます。山形・会津のいずれもが現在全国有数の「そば処」であり、「高遠そば」の名が離れた会津の地に残っていることから見ても、正之が蕎麦の伝道師の役割を果たしたことを否定することは出来ないでしょう。

伊那市の公式HPに掲載されている伊奈市長・白鳥 孝氏のメッセージを借りると「平成九年姉妹都市の会津若松市を高遠町の皆さん（ライオンズクラブ）

が訪れた時、会津の「高遠そば」に出会い、調べるにつれ「高遠そば」の名前も辛味大根と焼き味噌と葱を入れた汁に漬ける独特の食べ方も、その昔高遠から伝わったのだということが分かってきました。しかし本家の高遠では「高遠そば」の名前も食べ方もいつの間にか忘れ去られてしまっていたのです」（筆者意識・加筆）

そして「高遠そば」を復活させるために研究会が平成十年に発足し、逆輸入する形で現在の伊那市へ里帰りを果たしたのが平成十二年のことです。高遠町と会津若松市は親善交流都市を締結し今日に至っています。

歴史とは面白いものですね。もしかしたら、こういった話が私たちの周りにはいっぱい転がっているのかもしれないですね。私たちが気づかないだけで・・・。